



第 77 号
(年 4 回発行)
編集発行 弘 学 院 大 学
前 報 委 員 会
弘 広
印刷所
(有)小野印刷所

2019年 弘学祭開催



2019年度弘学祭レポート

今年度の学祭のテーマは、「虹色花火く輝く空に、皆の笑顔くまらせて頂きました。」

このテーマが付けられた由来として、文化祭に来て頂いた来場者はもちろんの事ながら、スポンサー協力という形で弘前学院大学を応援して下さいました。また運営陣も含む全ての教職員の皆様、そして文化祭を運営する学祭実行委員会や一般学生など、挙げていけば限りのない大勢の方々が抱く、弘前学院大学の文化祭という一つの行事に対する言葉では言い表せない、様々な想いや感情が入り混じるだろうと考えました。そんな全ての想いや

学祭実行委員長 三上 晃朋

感情を、学祭という場で咲き乱れさせる事が出来れば、それは正しく虹色の花火の様に散りゆく儂さと美しさが会場を包み込むだろう、と考えました。また運営陣も含む全ての人が花火の輝きを構成する一員と成れるように、という思いが込められています。

これまでの学祭では、前年と次年度への引継ぎが上手くなく資料の保管状況も雑で、追い打ちの様に業務の多忙な環境が「学祭実行委員長」という小さな肩に重くのしかかっていた。いわば、毎年ゼロ地点スタートの様なものでした。このような小さな課題が幾つもあるなりある事で、学祭実行委員会という組織そのものが学生に浸透しないという今の結果を生み出して



しまっているのだと、私は考えました。この事から、今年度の文化祭は「安全に楽しい学祭の運営を掲げつつも、もう一つの重要な取り組みとして「内部組織体制の改革を秘かに推し進めたい」と思いました。

まずは文化祭そのものに、学生からの意見である地域住民との関わりを持つ企画を吸い上げ、試験企画である『地域交流イベント(キャンドルアート)』を展開しました。この企画を機に、正式に住民の皆様へ文化祭の企画に参加協力を呼び掛ける事となり、弘前学院大学と住民との繋がりはより強固なものとなったのではないかと思います。また昨年度の「コスプレ大歓迎!」と

いう企画を改良し、骨組みとなる昨年の企画案を踏襲しつつ、新たな企画として生まれ変わった『仮装大会』その他細かな企画の確認と改良を重ねた『男装・女装コンテスト』『ミスター・ミスコンテスト』『カラオケ大会』『学長とのじゃんけん大会』『ハンドベルクワイア演奏会』『軽音楽ライブ』が今年度の文化祭の主要企画となりました。

しかしながら今年度の芸人ライブは記録的な猛威を振るった台風の影響もあり、予定していた「ひよこりはんさん」「ライオネスさん」「西村ヒロヨ」さんの出演は非常に残念ながら中止とせざるを得ない結果となりました。楽しみにしてお越し頂いた来場者には大変困惑させてしまった事を、この場をお借りしてお詫言申し上げます。

今年度の文化祭は、学祭実行委員はもちろんの事ながら有志の学生の協力、加えて快くスポンサーとなつて下さった方々、教職員の方々や学校近隣住民の方々、外部企業や社会福祉団体の皆様に至るまで、多くの皆様のご理解とご協力があった初めて成り立ったものと思えます。本当にありがとうございます。また昨年度の文化祭は、今年挙げられ



第1回高大連携・接続に関する高大教職合同研修会が開催される

学長 吉岡 利忠

2019年(令和元年) 8月27日(火) 午後2時から弘前学院聖

愛中学校高等学校の礼拝堂で開催された第1回高大連携・接続に関する高大教職合同研修会には、弘前学院大学として弘前学院のほとんどの教職員が参加した。それぞれが相互に資産として活用し貢献を考える趣

旨が込められており、教育、研究、運営、福利、厚生などについて忌憚らない意見および情報交換する場として設定され、今回、初めて同一法人の全スタッフが集った。ここでの議論をまとめ実現できそうなものから検討されることになり。現状維持は衰退するのみという言葉があるが、教職員はそれぞれの立場において常に前向きにかつ積極的な姿勢を持ち続けなければならぬ。特に本学における地域に根差した教育に関しては、入学前・入学時から在学中・卒業後まで滞ることなく一貫して進められなければならない。

これまで行われた生徒学生教育関係では高大接続(弘学ブリッジ)、出前講義、模擬講義、留学制度、学習支援、大学関連行事、ボランティア活動、部サークル活動などであり、情報交換や共有するものとしては、大学入学者に関する情報提供、交換、講師など派遣(進路講話、大学説明会、PTA研修会など)がある。

中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院
理事長・学院長 阿保 邦弘



十一 「大学入試改革再考」『偏差値』(その3)

何度も述べてきたが、現在、明治維新以来と言われる教育改革が進んでいる。

百五十年ぶりの大変革は、長年教育に携わった人間でも理解に時間を要する。

ましてや、直接教育に関係しない人が理解するのは容易ではないだろう。本学でも四年ほど前から学内改革の在り方を模索してきたが、その中核をなすのが高校・大学入試・大学が三位一体となった高大接続改革である。

学力の三要素を高校教育で育成し、大学教育でさらなる伸長を図る

ために、大学入試で多面的・総合的に評価を行うという改革である。ところで、新入試を模索するうえで決まってきたのが偏差値であった。

偏差値は、受験地獄解消の切り札として登場した共通一次を助ける役目だったが、いつの間にか悪役としての烙印を押されてしまった。偏差値そのものの存在が問題視されるようになり、教育界に問題が起るたびに偏差値教育のせいだとされた。

偏差値は確かに便利だが、受験者の集団に依拠する相対的なものにすぎないという実態を、すっかり棚

上げされてしまった。また、偏差値という統計的な概念自体には何の罪もないのだが、人々の心を支配するという魔力を持ち始めると、そこから脱出するのが困難な状況が生じてくるのである。

例えば、一度偏差値が大学の入学難易度を表すランキングとして表現されるや否や、あたかも大学そのものの価値を表しているかのような錯覚を与えるようになった。

つい最近、世界レベルを目指している東北の某国立大学内で、偏差値を再評価する議論があったという情報を耳にした。

期に、再び息を吹き返して表舞台に復活したのである。さて、偏差値信仰にとらわれている人々を単純に批判するのは簡単なことである。

しかし、早急に偏差値に代わる指標を作って可視化しない限り、偏差値を相対化することなどできない。たとえ、そうした指標が再び絶対化される危険性があったとしても、そのことに怖気づいている暇はない。

高大接続改革が目指しているのは、今までの出来不出来と言われた新たな評価の指標作りである。教科学力だけの一面的な評価を超えた、多面的評価に移行しようと

いう試みである。従来型の教育では、変動の激しい社会で活躍できる人材を育成するのは難しい。

教育を能動的な学びの場に変えて、思考力・判断力・表現力など多様な力を育成する必要がある。教育改革を単なる理想論だと揶揄する声もあるが、そのような姿勢では途方もない大波に立ち向かってきた本学の先人たちに顔向けができない。

創設者本多庸一は日本におけるキリスト教主義教育に挑んだ先駆者であるが、本学の存続のために偉人の背を追う努力は惜しまずべきでない。

「高大連携・接続に関する覚書が校長および学長間で取り交わされるところにも、高大連携協議会設置要項」が設定された。覚書および要項とも2019年(令和元年)7月8日の日付である。本協議会の委員は、高校側から高校教頭、高校教務主任、高校進路指導部主任、大学側から副学長、文学部長、社会福祉学部長、看護学部長である。そして本協議会での会議、打ち合わせを経て、この度、第1回教職合同研修会が開催されるに至った。

当日は、弘前学院大学薬科勝の副学長より本協議会設立の趣旨が説明され、高等学校教頭の岩淵静夫先生が司会者となって進められた。協議会では次のような意見が司

今後、これらの意見をどのように高校・大学の教育や運営に反映していくのか本協議会で検討されることになる。日時は未定であるが、第2回目の開催が予定されている。



研究紹介(45)

デュニーの教育思想の根源への問い

文学部 英語・英米文学科 講師 松橋 俊輔



私は、アメリカの哲学者であるジョン・デュニーの思想を研究対象としています。

現在、我が国では教育改革が大変なスピードで進行しています。さまざまな話題が世間を賑わしていますが、単なる知識の蓄積ではない生きた学力への志向、主体的で対的な学びの重視など、改革の大きな方向性をみれば、頷ける点が多いのは事実です。しかし、その一方で平成30年度の小中学生・高校生の自殺者数は平成年間最多となったほか、いじめ、不登校も統計上増加しています。いま、本当に必要な教育の変化とは、どういったものなのでしょうか。昨今の教育改革の動きの源流

のようになってはいえないでしょう。

そもそも、デュニーの教育理論、その前提となる彼の独自の「心理学」の原型は、彼のキャリアの初期において、よさとはなにか、幸福とは何か、という倫理的な問いへの探究を通して形成されました。そうした思想形成の背景には、19世紀後半のアメリカ知識人を取りまく思想状況、自然科学的な世界観の浸透によるニヒリズムの問題がありました。デュニーは、倫理学の方法論として「心理学」を用いながらも、価値を事実で還元してしまうことなく、自由とデモクラシーという理想を描き、よさについて、幸福について語りました。彼にとつての倫理学と心理学との関係性を解き明かすことが、主として心理学にもとづき展開され、時として方法論に限定されてしまいがちな教育言説の死角に光をあてるのではないかと考え、これを研究課題としています。

談話室

上手に掛け合わせる視点

社会福祉学部 教授 高橋 和幸



電気とガソリンの2つの動力源をもつハイブリットカーをよく見かけられるようになりました。このように異種のを組み合わせることで利便性が高まるものには携帯電話やスマートフォンも思いつきます。通話だけで

なく電子メール機能、写真撮影・録音機能・電卓機能等が付いて便利だからです。

私は除雪ボランティア活動について研究しておりますが、何か別のものと掛け合わせることで除雪ボランティア活動が魅力を増すことができないかと考えています。たとえば、寄せた雪での雪像作りや雪上かんじき体験等を含む観光ツアーがあり、積雪のない地域の人を除雪ボラ

聖愛高校第2学年生 キャンパスライフ体験大会の開催

学長 吉岡 利忠

2019年(令和元年)9月9日(月)、聖愛高校第2学年生キャンパスライフ体験大会が弘前学院大学の礼拝堂、新設された大学一号館の各講義室や大講義室で開催された。これまで数回にわたり開催されてきたが、高校校長や進路指導部主任の意向を強く反映しながら大学入試広報センターが取り組んだイベントである。体験大会と名称を変えてから第2回目となる

れた「高大連携・接続に関する覚書」(二面参照)があるが、その内容と異なるものではないであろう。

当日の模擬講義内容(テーマ)は表1に示されており午前中に講義を終え、その後、各部説明会が続いた。文学部には54名、社会福祉学部には44名、看護学部には66名が参加した。大学案内、大学ホームページに記載はされているものの、実際の教員や事務員から各学部のカリキュラム、科目、担当教員、奨学金、他大学ではない大学の特徴や取

表1 講義内容(テーマ)・担当者

Table with 3 columns: 学部・学科, 講義内容(テーマ), 担当者. Rows include Who Am I and Who Are You?, What in the World?, サイバーカルチャーの時代を生き抜く, フラクタル, 「うわさ」(SNS等)からの情報収集・発信の考え方, キリスト教社会福祉について, 病とともに生きる人の看護, 精神看護の魅力.

に作業時間に応じた活動ポイントが付与されれば市営バス乗車券の購入等に充てられるといった取組もあります。雪はじやまもの、除雪作業はつらいものというイメージを払しょくするためにも、前向きな取組を普及させていく必要性を大いに感じます。現在、青森県でも少子化対策の一環として「あおもり出会い協働プロジェクト事業(結婚支援)」が行われています。私

父母と教職員の会 父母・教職員研修会報告

七月二十七日(土)に

二〇一九年度父母と教職員の会父母・教職員研修会が催されました。新1号館1階ラーニングゴモンズを会場に、保護者二十三名と教職員及び関係者二十一名の計四十四名が参加しました。

本研修会は「親のための就職講座」と題し、一般企業、福祉施設、病院等の各分野の講師を招いて、最近の就職活動状況や企業・施設側が採用したい学生像等について講演していただきました。

社会情勢や就職環境の変化に伴う就職状況の違いを保護者の皆様に理解していただくこと、ご家庭での就活へのサポートに役立つ情報の提供を目的として企画され、一昨年より引き続き今回で3回目の実施となります。

は、参加した方々が同居高齢者等のお宅の除雪作業と一緒に行動達成を得ながら語り合う、こうしたイベントと除雪ボランティアのハイブリット化を提案しています。しかし、全く普及しないところを見ると時代のニーズにマッチしないのか、それとも私の発信力・影響力の無さなのか、フォローアップを模索する日々です。

株式会社マイナビの安齋輝氏の講話では、就職活動スケジュールや大学求人倍率など現在の就職環境や、多様化する就

職活動の状況、学生自身が大学生活を通じて取り組むべきこと、保護者の意識とサポートなどについて、様々な調査によって得られたデータを基にお話しがありました。株式会社小山内バッテリー社の相馬正人氏の話では、自社の就職後の教育体制、家庭で身につけてほしい基本的能力などについてお話がありました。社会福祉法人七峰会の古川友彦氏の講話では、スライドを用いた自社の紹介、七峰会に就職した本学卒業生の活躍状況のほか、自社における企業としての地域貢献活動などについてお話がありました。医療法人整友会弘前記念病院・看護部長の一戸悦子氏の講話では、県内の看護師不足の状況について説明されたあと、自院における新卒就職状況、臨地実習受け入れ状況、卒後教育、求める人材などについてお話がありました。



得可能な資格などの説明は、このような体験学習により生徒を始めとし私たちの脳裏に残るものとなる。さらに充実したイベントになるように中高大の関係者の努力を期待したい。

2019年スポーツ大会レポート

校友会執行委員 粒来 太樹



今年の夏は全国的にも異例の暑さが長く続いた夏になった。この弘前も厳しい暑さが続き、新号館になってからはじめての夏だったが、「暑い」という声が多く出た夏だったと思う。その

暑さを考慮し、今年度も昨年同様に、熱中症対策として後期開始日の直前である九月二十日に開催した。結果として暑さを気にせず



スポーツを楽しむことができたように感じた。今年度のスポーツ大会は例年同様、男女別のバドミントン、バレーボール、バスケットボールの3

種目で行った。今年度の参加者は約50人程度とあり、残念ながら昨年度の半分も参加者が少ない状態であった。また、女子バレーボールと女子バスケットボールが参加チ

ム不足で開催できなかった。しかし参加者が少ない分、参加者の要望に答え、バドミントン、バレーボール、バスケットボールの各3競技の競技時間や点数を増やして行った。それによって各競技に出場した選手はのびのびと競技に当たることができ、思う存分に楽しむことができたと思う。

バドミントン

(男子)

チーム「初心者」

英語英米文学部2年

古川 駿

(女子)

チーム「チームひづめ」

社会福祉学部1年 齋藤千陽

バレーボール

(男子)

チーム

「おつかめホーテ元気ん玉」

社会福祉学部4年

小田桐辰徳

バスケットボール

(男子)

チーム「わかば」

英語英米文学部3年

山口尚人

2019年度1年生の特待生授与者

二〇一九(令和元)年度の弘前学院大学特待生(一年生)に、十月三十日(水)十二時より賞状の授与が行われた。今年度の授与者は次の方々です。

- ◆文学部 一年 鶴ヶ谷朱梨(弘前実業高校)
- ◆社会福祉学部 一年 西 亮馨(岩手県立大野高校)
- ◆看護学部 一年 奥崎 彩聖(青森高校)



お知らせ

- ◆クリスマス礼拝 12月12日(木)16時より
- ◆クリスマス音楽の夕べ 12月12日(木)18時30分より

場所：弘前学院大学 礼拝堂 入場無料(整理券配布)

尚、音楽会については、本学まで問い合わせ下さい。独唱・女声合唱・パイプオルガン・ハンドベル演奏等を予定しています。

文学部企画



文学部企画として、英語・英米文学科は、アメリカやイギリスの文化に触れるイングリッシュ・カフェを行った。コーヒーや紅茶に合う様々な種類のパンケーキが提供され、多くの来場



者に恵まれた。その他にも英語の相談コーナーを設けていた。日本語・日本文学科では、鎌田先生の企画による、「和



社会福祉学部企画は、学部長の石田先生の企画が3つ行われた。

社会福祉学部企画

と洋「寺院と教会」などをテーマに、つがる地方の建物の写真展示があった。また、国語国文学会の学生による1年間の活動報告があった。普段活動している様子や文学作品や作家にゆか

りのある地を訪れ、作品や作家に関する理解をより深める文学散歩の展示が行われた。日ごろ行っている活動を紹介する良い機会となったであろう。

1つ目は「Death Ag ora(デスアゴラ)」である。21世紀の人間の死の問題と向き合うというテーマで本学卒業生の絵画の展示があった。

2つ目は「増田侑奈展」。社会福祉学部3年の増田さんが描いた作品が展示された。増田さんによる紙芝居の実演もあった。

3つ目は「農福連携を考える」である。農家の人々による農福連携の取り組みについて写真中心で展示があった。実際に岩手



県にあるカナン園という社会福祉施設を訪れ、「農福連携」を体感した。同時に農家で採れた野菜やクッキーなどの販売も行った。

また、番外企画として「旧1号館の記録と記憶」をテーマに旧1号館の歴史を振り返る写真展示の企画もあった。

看護学部企画



看護学部では映画上映、ワークショップなど6つの企画運営を学生が行いました。認知症サポーター養成講座では、弘前市

タルクリニックなごみ所長精神科医・蟻塚亮二先生の講演を行いました。講演後は障害を持つ人の過去を理解し、共に生きる私たちには何ができるのか、グループセッションを行いました。



た。この他、教員と学生による写真展、さらに体験型の展示として、アルコールパッチテストなど看護学部ならではの企画が行われました。学祭のために学生自ら力を合わせて企画運営を行ったことで、日頃の学生生活とは違った充実感を得ることができました。